

化療センター発表会印象記

2013年 4月 26日に吉田講堂にて第4回がん化学療法センター研究発表会が行われました。今年の演題には臨床と連携して進められている研究が含まれ、「がんの化学療法に関する基礎研究と臨床研究を推進し、新しい抗がん剤と新しい治療法を開発する」という化療センターの理念がはっきりと伝わる内容でした。

がん化学療法センターでは、がん細胞の増殖や転移に関わる分子を標的とし、がんの増殖を抑えたり進展を阻害する「分子標的薬」の研究開発を行っています。分子標的薬には、効果が予測できる患者さんに投与できる、副作用が少ない、といった長所がありますが、薬を使い続けるとがんに効きにくくなる「耐性」が起こることがある、といった短所があります。そのため、耐性の原因を明らかにし克服する方法を提供することが治療に重要です。今回の発表には、臨床部・基礎研究部・分子薬理部を中心に、治療薬や治療薬の耐性機構の解明を目的とする研究が多数ありました。基礎研究部においても臨床現場と連携しての研究が開始され、新たな知見が蓄積されて治療に役立つ日が来ることを予感させられ、ワクワクしました。



新規標的に関する基礎研究分野でも、この1年間で多いに進展した発表がありました。その1つ、分子生物治療研究部の各発表では、がんの根幹に関わる遺伝子の機能に関する研究が一気に進展していることがわかり、大変刺激を受けました。また、基礎研究部の c-MET 阻害剤 Tivantinib の新たな分子標的の同定についても同様です。この研究は基礎研究部と米国 MGH との共同研究から始まり、分子薬理部による分子標的予測システムで標的を予測し、基礎研究部で新たな標的として微小管重合阻害を同定したもので、ラボの連携という意味でも印象的でした。



化療センターのもう1つの柱「治療薬創製」の分野でも、基礎研究部の転移阻害を目的とした抗 Aggrus 抗体、分子生物治療研究部のテロメラーゼ阻害剤に新たな知見が報告され、益々の進展が期待される発表で



した。またゲノム研究部では、がんの微小環境での動態に重要である小胞体ストレスを標的としたスクリーニングが非常にユニークな方法で開始されており、今後が楽しみです。

今回の発表会では、研究に携わる全員が発表するという形式ではなくなり、各人の得意技紹介といった側面は薄れました。しかし、各部の部長先生方による研究方針のご発表を受けて各演題を拝聴すると、大きな目的に向かって体系的に各人が研究および研究ツールの開発を行っていることがわかり、これらが繋がったときを想像して躍動感を感じ、元気を



を分けて頂いた気がします。元気といえば、恒例の新人さん自己紹介で若い研究者さんや学生さんがフレッシュなプレゼンをされ、会場が穏やかな空気に包まれました。また今年初めて ADIO（制がん剤情報室）の楽しい発表がありました。対外活動の支援を通して研究を支えて下さる方々にあらためて感謝する次第です。

最後に、吉田所長より「全体的にプレゼンテーションが上手になった。がんの臨床に結びついた研究が格段に増え、歓迎すべきことである。」というコメントを頂き、みなそれぞれが励まされて、発表会が終わりました。



私は阻害剤の創薬研究を行っています。実際に治療に役に立つ研究という視点にたったときに、未解明な点を残しており、苦労している部分があります。臨床を意識し、より体系的に研究を進めていかなければならない、という自戒と共に、今年1年を頑張ろうと思います。

分子薬理部 大橋愛美